

## 女性のライフコースとスポーツへの再社会化に関する研究 — ママさんバレーボールプレーヤーを対象に —

勝田 一平 丸山 富雄

キーワード：生涯スポーツ，ライフイベント，スポーツへの再社会化

### A Study on Women's Life Course and Resocialization into Sport : A Case of Women Volleyball Player

Ippei Katsuda Tomio Maruyama

#### Abstract

The purpose of this study is to examine the relationship between life events and resocialization into sport of women volleyball players.

The questionnaire asked women volleyball players about their: 1) personal attributes 2) family 3) life events 4) socializing agent. The data was provided by 205 women volleyball players in Sennan area, Miyagi prefecture.

The main result can be summarized as follows:

- 1) The average age when resocialization into sport takes place is pre-school child rearing period.
- 2) The average age of which life event (marriage, childbirth) takes place has not increased with the generation. This is unlike the common tendency among female.
- 3) Friends living nearby was a direct factor which was found to affect on those who resocialize into sport for pre-school child rearing period. Latently, it was suggested to the influence of a child cannot be denied, either.
- 4) About indirect factors that affect socialization into sport, sporting hero and heroine (e.g. success in Olympic Games) was found to be significant.

Key words : Lifelong sport , Life event, Resocialization into sport

#### 1. はじめに

我々の住む社会一般におけるスポーツ現象は、あるまとまりをもって理解されよう。すなわち、人間の集団として捉えることである。しかしながら、このようなまとまりは個のまとまりとして理解されなければならない。したがって、多様な個性の集まりから成る人間集団といえよう。このような個性の集まりとしての集団・組織の変

化を時系列的に、ライフコースの視点から捉え、スポーツ現象は、なにとどのような関係があるのかを導き出すことは本研究の主題の1つである。

他方、スポーツへの社会化は、人のスポーツ行動を理解する上で、つまり、人がなぜスポーツを「する」、「見る」、「支える」のかを知ることの視点である。スポーツへの社会化は、今日の生涯スポーツ時代において「参加

「一継続一離脱一再社会化」といった枠組みで捉えられる。特に、再社会化は、人間の一生の中で捉えても、人生の後半部分に近いところでなされることが多く、その対象は必然的に中高年齢の人々となろう。「参加」と「再社会化」は、「参与」といった観点みれば、密接に関係はするもののそれらに及ぼす要因は後者のほうがより多様であろう。

女性のライフコースは、その生物学的特性から個人におけるライフイベントの影響が顕著にあらわれる。例えば、出産がそれである。言うまでもなく、出産は女性固有のものであり、男性は、直接的には経験しない。女性は、出産後、当然のことながら母親となる。母親となった女性は、以前とは異なる役割を担うこととなる。このように、男性と女性はセックスとしてはもちろんのこと、ジェンダーにおいても差異がみられるのである。女性における標準年齢的なライフイベントは、結婚、出産などをはじめ、就学、就職なども含まれる。女性のライフコースは時代を経るごとに刻々と変化し、一昔前のそれとは、かなりの変化がみられる。今日では、その多様な生き方が社会的にもかなり認識されている。

本研究は、女性のライフコースにおける標準年齢的なライフイベントと女性のスポーツへの再社会化との関係を検証することを1つの目的としている。そして、準拠集団における重要な他者とスポーツへの再社会化との影響を探ることを第2の目的とする。また、北村<sup>6)</sup>の研究における歴史的イベント（オリンピックやワールドカップ等々）と「するスポーツ」への再社会化の関係を検証し、さらに、女性のスポーツ実施とマス・メディアの影響関係を探ることは、第3の目的とする。

そこで、以下の作業仮説を提示した。成人女性の場合、スポーツへの再社会化は、ライフイベントと関係する。このようなスポーツへの再社会化は、準拠集団における重要な他者と関係している。また、スポーツ界のイベントやマス・メディアを介した人物（スポーツヒーローなど）は、スポーツの実施と関係する。さらに、スポーツ漫画やTV番組もその実施と関係する。

## II. 先行研究

三宅は女性を対象にした運動継続パターンに関して、余暇活動参加歴を時系列的に概観し、結婚・妊娠などといったライフイベントが余暇活動に影響を及ぼしていることを報告した（三宅、1990）。世代間による比較の視点では、余暇生活に関するものではあるが、中年者と高齢者の比較を行なったものがある（土肥、1995）。生沼は、森岡清美のイベント時点区分法を用い、幕内力士と年寄りのライフコース（人生行路）の歴史比較、およびその師弟関係の歴史的推移から、我が国の社会変動とともに相撲社会がどのように変動したのかといった過程を明ら

かにした（生沼、1994）。これらの研究は、それぞれの立場でライフコースの視点を取り入れている。

ライフコースとスポーツへの社会化についての先駆的研究として、北村の研究がある。北村は、日本の社会化研究への新しいパースペクティブとして、ライフコース分析の必要性を提唱し、その具体的な試みとして、スポーツへの社会化研究への適用をおこなった。そして、小学校、中学校、中学校卒業後20歳までの3時点でのスポーツ経験に関してコーホート分析を用い、スポーツへの社会化と歴史的イベントの関連を考察した。その結果、歴史的イベントとしての東京オリンピックは、当時の小学生のスポーツ参加に影響を及ぼしたことを実証した。また、ライフコース分析をスポーツへの社会化に適用することは、多くの課題があるとしながらも国民体育大会の開催や近隣で運動施設ができた等々、地域的事件の影響分析にも応用できることを確認したとしている（北村、1996）。

スポーツへの社会化とマス・メディアに関して、古谷は、「自分もプレーしているような気持ちで見ているのは男子より女子に多く、女子の方がブラウン管上のプレイヤーに同一化しやすい傾向にあるという。」との報告をし、女子は「実際の試合を見に行きたいといった観客としての意識レベルでのスポーツ参与を強めているようである」とした（古屋、1988）。しかしながら、家庭婦人スポーツなどの成員ではどうであろうか。彼女らのようなスポーツ経験者は観戦行動を志向するというよりも、むしろスポーツを見ることをとおして、「するスポーツ」へのきっかけをつくるのではなかろうか。また、子供を対象にした湯沢らの研究では、好んでみるスポーツ番組の種目別視聴者層は、男子がサッカー、プロレス、プロ野球が多いのに対し、女子ではテニスやバレーボールが多いとしている（湯沢、1985）。成人した女性を対象とした場合でも、同様のことが報告されている。このようなことから、成人女性のバレーボールプレイヤーは、テレビ視聴によりスポーツを「する」ことに大いに関係すると考えられる。

## III. 研究方法

調査は、女性バレーボールプレイヤーを対象に郵送法を用いて行った。宮城県仙南家庭婦人バレーボール協会登録チームは1部から5部で構成される。そのうち、競技水準が比較的高く、スポーツへの取り組みが比較的熱心であり、スポーツ参与に積極的であろうと思われる1・2部に所属する22チームを対象とした。回答をうけたチームは20チーム、205人であった。質問紙回収率は77.4%である。有効回答数は、200であった。調査時期は、2001年8月1日～同31日であった。調査内容は、個人の属性に関すること、ライフコース上の出来事に関すること、過去のスポーツ経験・スポーツへの社会化に関す

ること、スポーツへの再社会化に関することである。分析の視点はライフコースに求める。ライフコースとは、「年齢によって区分された生涯期間を通じての道筋であり、人生上の出来事についての時期、移行期間、間隔、および順序にみられる社会的パターン」とされる。個人のライフコースは「社会構造内での個人の社会的位置の移動の道筋」であるともされる(本田・齋藤, 2001)。ライフコース分析には、コーホート法による世代間の比較などがあるが、本研究では、森岡清美のイベント時点区分法を参考とし、標準年齢的ライフイベントとスポーツへの再社会化の関係を分析した。また、世代を独立変数とし、クロス集計を行った。

IV. 結果と考察

1. 属性

対象者の属性において(表1)、最終学歴は、高等学校卒業が最も多く、全体の72.6%を占めた。結婚に関しては、93%の者が既婚であった。現在の家族構成は、夫婦と子ども、夫婦と子どもと親が全体の83%を占めた。子どもに関しては、97%の者が有しており、93%の者が子どもと同居している。仕事に関しては、83%の者が有職者であった。

現在の家族構成において、子どもを有し、同居しているものが多く、子どもとの関連でスポーツへの再社会化の要因がつけられるのだろうか、といった問いが生まれる。仕事に関しては、思いのほか有職者が多かった。野々宮は、「初期のママさんバレーボール愛好者の主体は、市町村におけるいわゆる専業主婦といわれる人々や農林業に従事する人々であったといえることができる」(野々宮, 1996)としたが、今日ではそうとも言えないことが示唆できる。属性全体に関して言えば、前田が指摘するところの、すなわち「既婚の子どもをもつ中年期の女性」(前田, 1998)であった。現在年齢に関しては、世代間(10年単位)と他の変数との関係をみるために変数を加工した。

2. 標準年齢的ライフイベントとスポーツへの再社会化の関係

ライフイベントとスポーツへの再社会化の位置を示すために、各ライフイベント年齢とスポーツへの再社会化年齢の平均値を算出した。それらは、就職が18.8歳、結婚が23.2歳、第一子出産が24.1歳、末子出産が28.4歳であった。スポーツへの再社会化年齢の平均は、29.4歳であった。ライフイベントの順序は、就職—結婚—出産といった順序であった。平均的には、スポーツへの再社会化は、末子出産後に行われたといえる(図1)。

世代とライフイベントの平均年齢の関係(表2)では、就職を除いたライフイベント年齢では、20歳代、30歳代

表1 属性

現在年齢		N=200		子ども	
20~29歳	18	9.0%	有	194	97.0%
30~39歳	73	36.5%	無	6	3.0%
40~49歳	94	47.0%	子どもとの同居		
50~59歳	15	7.5%	している	186	93.0%
			していない	14	7.0%
最終学歴		NA=3		仕事	
中学校	3	1.5%	有	166	83.0%
高等学校	143	72.6%	無	34	17.0%
専門学校	31	15.7%	有職者の職業		
短期大学	17	8.6%	会社員	59	35.8%
大学	3	1.5%	自営業	22	13.3%
			農林漁業	3	1.8%
			公務員	6	3.6%
			臨時・日雇い・パート	59	35.8%
			その他	16	9.7%
				NA=1	
きょうだい数		NA=1		無職者の内訳	
0人	7	3.5%	家事手伝い	2	5.9%
1人	70	35.2%	主婦	30	88.2%
2人	83	41.7%	退職者	2	5.9%
3人	27	13.6%	その他	0	0.0%
4人	8	4.0%			
5人	1	0.5%			
6人	1	0.5%			
7人	1	0.5%			
8人	1	0.5%			
結婚状況		NA=3			
未婚	3	1.5%			
結婚	186	93.0%			
離別・別居	9	4.5%			
死別	2	1.0%			
現在の家族構成		NA=3			
独身(親と同居)	1	0.5%			
独身(親と別居)	2	1.0%			
夫婦(夫婦のみ)	10	5.0%			
夫婦と子ども	78	39.0%			
夫婦と親	3	1.5%			
夫婦と子どもと親	88	44.0%			
その他	18	9.0%			
高齢者との同居		NA=3			
している	88	44.7%			
していない	109	55.3%			

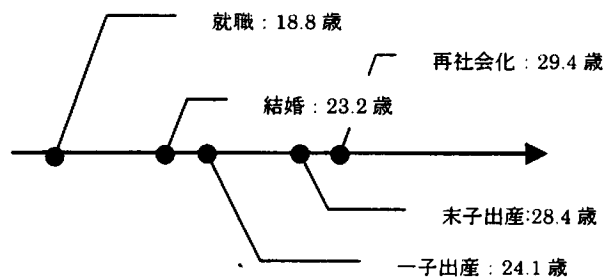


図1 ライフイベント年齢とスポーツへの再社会化年齢

表2 世代とライフイベント年齢

生年	ライフイベント		第一子出産	末子出産	再社会化
	就職	結婚			
1970年代	平均 18.9	22.3	23.0	27.3	29.5
	標準偏差 1.379	1.601	1.859	2.632	3.799
1960年代	平均 18.9	22.7	23.7	28.0	29.1
	標準偏差 2.178	2.654	2.998	4.083	4.776
1950年代	平均 18.8	23.5	24.4	28.5	29.6
	標準偏差 1.782	3.680	2.804	3.284	5.105
1940年代	平均 18.8	24.5	26.3	30.4	30.9
	標準偏差 1.046	2.500	3.193	3.480	3.324

\* p<0.05  
\*\* p<0.01  
\*\*\* p<0.001

と50歳代の間には、いずれも有意な差がみられた。ライフイベントの平均年齢は、就職を除いて世代が古くなるにつれて、緩やかに増している。スポーツへの再社会化の平均年齢は、50歳代でやや高いが、他の年代との関係で、変化があるとはいえなかった。近年、晩婚化の影響で、時代を経るにつれ、ライフイベント年齢が高くなるのが一般的傾向であるが、本研究対象者は、一般的女性の傾向と相反するものであった。

末子出産後にスポーツへ再社会化した人々とそうでない人々は、どのくらいの割合であるのだろうか。スポーツへの再社会化年齢を基点に末子出産年齢の位置関係から対象を4つのカテゴリーに分類した(図2)。末子出産より6年後は、いわゆる末子が小学校へ入学する時点であり、「出産・育児期」と「子育て解放期」の境界といえる。

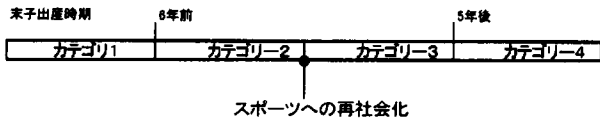


図2 末子出産からみたスポーツへの再社会化の時期

末子出産後にスポーツへ再社会化した人々は、116人になり、全体の64.1%を占めた。カテゴリー1に属する人々は、23人(12.7%)であり、カテゴリー2に属する人々は、93人(51.4%)、カテゴリー3に属する人々は43人(23.8%)、カテゴリー4に属する人々は、22人(12.2%)であった(表3)。これらのカテゴリーは、出産を基準としたスポーツへの再社会化位置であり、カテゴリー2の人々、すなわち「出産・育児期」に属する人々の割合がもっとも多いことは強調すべきことである。

表3 末子出産年齢とスポーツへの再社会化年齢の差における分類

カテゴリー	1(-13~6)	2(-5~-1)	3(0~4)	4(5~10)	統計
N	23	93	43	22	181
末子出産年齢					
平均	27.9	27.5	28.4	31.1	28.4
標準偏差	2.193	3.356	3.737	3.554	3.587
スポーツへの再社会化年齢					
平均	35.6	30.5	27.5	24.7	29.7
標準偏差	3.268	3.497	3.719	3.319	4.598
現在年齢					
平均	40.2	39.7	40.6	41.4	40.2
標準偏差	4.940	6.908	6.915	5.844	6.594

### 3. 考察1

スポーツへの再社会化は、平均的には末子出産後になされたことがわかった。平均値でみる限り、末子出産後1年でバレーボールを再開していることは、調査対象者は、必ずしも「子育て解放期」にスポーツを始めたのではな

く、その時期は、「出産・育児期」にあったといえる。

世代と各ライフイベントの平均年齢の相違では、ライフイベント年齢は、就職を除いて、世代を遡るごとに増加している。一般的女性では、時代を遡るごとに、ライフイベント年齢は、減少する傾向にあるが、本研究対象者では、その反対の傾向を示した。

末子出産後の女性のライフコースは、「子育て解放期」に向かい、女性は、個人として自由な時間を持ち、カルチャーセンターなどの趣味や娯楽に充実した日々を過ごすことを望む傾向にあるという。この「子育て解放期」は、時代を経るごとに増大し、女性のライフスタイルに急速な変化をもたらした。しかしながら、本研究における対象に関しては、「子育て解放期」においてスポーツへ再社会化した人々は、23人(12.7%)であり、むしろ「出産・育児期」にスポーツへ再社会化した人々が多かった(51.4%)。つまり、本研究対象者は、その活動の主体がスポーツ故であろうか、子育てとの関係でスポーツへ再社会化することが多いとの推測ができる。

### 4. スポーツへの再社会化要因

本研究において、スポーツへの再社会化要因として、直接的影響としての重要な他者についての質問を試みた。分析の対象となった数は、180人であり、そのうち87人(48.3%)が重要な他者の影響を受けていた。出産を基準としたスポーツへの再社会化時期の各カテゴリーによる直接的な重要な他者の内訳(表4)をみてみると、1と2のカテゴリーにおいて地域の友人の割合が多く、それぞれ72.7%、65.3%であった。

表4 再社会化時期と直接的な重要な他者の内訳

カテゴリー	N	影響を受けた人 有のn	内訳						
			両親	夫	子ども	学生時代の友人	地域の友人	その他	
1	23	47.8%	11	0.0%	9.1%	18.2%	0.0%	72.7%	0.0%
2	93	52.7%	49	2	3	5	9	32	4
				4.1%	6.1%	10.2%	18.4%	65.3%	8.2%
3	42	35.7%	15	1	7	5	1	4	4
				6.7%	46.7%	33.3%	6.7%	28.7%	0.0%
4	22	54.5%	12	1	5	3	4	5	2
				8.3%	41.7%	25.0%	33.3%	41.7%	16.7%
全体	180	48.3%	87	4	16	15	14	49	6
				4.6%	18.4%	17.2%	16.1%	56.2%	6.9%

マスメディアを介してしての重要な他者の影響、すなわちスポーツヒーロー、ヒロインについての影響の有無への問いを試みた。そして、世代を独立変数とし、影響の有無とのクロス集計を行った(表5)。その結果、有意差はみられず、自由回答で得た影響を受けた人物は、世代により違いはなかった。しかしながら、その内訳をみると、オリンピックやワールドカップといったビック・ゲームにおける日本代表選手を選択している傾向が

強く、その時代のいわゆる花形プレーヤーを選択しているようである。

表5 世代と間接的な重要な他者の影響

生年	有名人物の影響		総計
	有	無	
1970年代	5 29.4%	12 70.6%	17 100.0%
1960年代	11 15.3%	61 84.7%	72 100.0%
1950年代	15 16.5%	76 83.5%	91 100.0%
1940年代	3 23.1%	10 76.9%	13 100.0%
全体	34 17.6%	159 82.4%	193 100.0%

$\chi^2=2.249$   
n.s.

### 5. 考察2

考察1では、スポーツへ再社会化する時期は、「出産・育児期」が最も多いことが示唆され、その再社会化の影響として、子どもの可能性をあげた。しかしながら、カテゴリー1と2の人々、すなわち「子育て解放期」、「出産・育児期」にスポーツへ再社会化した人々に影響を与えた重要な他者は、地域の友人が最も多かった。社会化のエージェントとしての重要な他者、すなわち家族の影響はよく知られており、江刺は「スポーツを一緒にやる仲間は家族、PTA等の仲間が多い」（江刺、1992）と指摘している。本研究結果においては、重要な他者として地域の友人が多数を占めた。しかしながら、女性にとっての家族、すなわち子どもの潜在的な影響は否めない（McPherson et al. 1989）。

間接的な重要な他者に関しては、世代間での比較による有意差は認められず、影響を受けた人物は、世代により違いはなかった。しかしながら、自由回答記述による内訳では、横山樹里、中田久美、江上由美に影響を受けた人が多いことがわかった。

### V. まとめ

女性バレーボールプレーヤーがスポーツへ再社会化する年齢と標準年齢的なライフイベント（就職、結婚、出産）の経験年齢との関係が明らかとなり、ライフコースにおけるイベント年齢とスポーツへの再社会化年齢の平均的位置が示された。それによると、「するスポーツ」への再社会化は、平均的には未子出産後になされ、その位置は「出産・育児期」であったことがわかった。世代とライフイベントの関係では、就職を除いたライフイベントすべてが時代を遡るごとに上昇していたことがわかった。これは、一般成人女性の傾向と相反するものであった。直接的な重要な他者の影響では、「子育て解放期」、「出産・育児期」には、地域の人々との関係により再社

会化する人々が多いようであるが、潜在的には子どもの影響も否めないことが示唆された。間接的な影響であるスポーツヒーロー、ヒロインが再社会化要因として成立するかどうかは、確かめられなかった。しかしながら、スポーツに社会化する上で、影響を受けた人物として、横山樹里、中田久美、江上由美といったオリンピックやワールドカップというビッグ・ゲームで活躍したプレーヤーの名前があげられた。

### VI. 今後の課題

今後の課題として、考察2で挙げられたスポーツヒーロー・ヒロインと目される選手らが、メディアをとおしていわゆる象徴・アイコンとして機能し、その「受け手」にとってどのような関係があり、影響を与えているのかといった問題提起ができよう。例えば、バレーボールに関してスポーツヒーロー・ヒロインとされる人のメディアイメージもあろうが、その種目の特性として、ゲームの場におけるそのヒーロー・ヒロインが位置するポジションによる「あこがれ」の度合いの相違なども考慮できよう。また、これらの人物が活躍したイベントや北村のいうところのスポーツ界における歴史的イベントとの関わりを明らかにし、社会構造内での時代の流れに位置づけ、関係や影響を考察することも可能であると考えられる。

### 文 献

- 1) 長ヶ原誠・山口泰雄・池田勝（1992）高齢者におけるスポーツ活動への再社会化に関する研究。鹿屋体育大学紀要7：31-41.
- 2) 土肥隆・高見彰・山口泰雄（1995）高齢期の余暇生活に関する中年者と高齢者の世代間比較。自由時間研究17：155-162.
- 3) 江刺正吾（1992）女性スポーツの社会学。不味堂出版.
- 4) 本田時雄・齊藤耕二編（2001）ライフコースの心理学。金子書房.
- 5) 古屋正俊（1988）スポーツとマスコミュニケーション。糸野豊編著。現代スポーツ指導者論-その社会学的見方・考え方。ぎよせい.
- 6) 北村薫（1990）ライフコース分析と社会化。教育社会学研究46：35-51.
- 7) 糸野豊（1997）21世紀における生涯スポーツの展望と課題。中京大学体育研究所紀要11：別冊
- 8) 前田博子（1998）中年期女性のスポーツ活動に関する研究-「家庭婦人」競技大会に着目して-。日本体育学会49回大会体育社会学専門分科会発表論文集：65-70.
- 9) 丸山富雄（2001）近代性のゆらぎと「遊びのとしてのスポーツ」の復権。仙台大学紀要32：1-8.

- 10) McPherson, B. D. (1984) Sport Participation Across The Life Cycle: A Review Of The Literature And Suggestions For Future Reseach, SOCIOLOGY OF SPORT JOURNAL 1(3) 213-230.
- 11) McPherson, B. D., Curtis, J. E., Loy, J. W. Jr. (1989) The Social Significance Of Sport: An Introduction To The Sociology Of Sport. Human Kinetics : Champaign.
- 12) 三宅基子 (1990) 女性の余暇活動参加歴に関する研究. レクリエーション研究 23.
- 13) 森岡清美 (1987) ライフコース接近の意義. 森岡清美・青井和夫編. 現代日本人のライフコース. 日本学術振興会.
- 14) 野々宮徹 (1996) スポーツ・イベントの文化史—家庭婦人バレーボールとその担い手とその時代—. 体育の科学 46 : 365-369.
- 15) 生沼芳弘 (1994) 相撲社会の研究. 不昧堂出版.
- 16) 菅原禮編 (1984) スポーツ社会学の基礎理論. 不昧堂出版.
- 17) 鈴木守・古屋正俊 (1983) テレビ・スポーツ番組の“面白さ”について—視聴行動のプロローグとして—. 上智大学体育 17 : 53-62.
- 18) 山口泰雄 (1989) 「生涯スポーツの考え方と理論的枠組み」鹿屋体育大学編, 生涯スポーツの理論とプログラム, 鹿屋体育大学.
- 19) 湯沢恒人・鈴木守・古屋正俊 (1985) テレビ・スポーツ番組の視聴行動に関する研究 (2). 第三十六回日本体育学会大会号.